

南 方（フィリピン）

比島で召集されて

和歌山県 酒 本 数三郎

私は昭和十四年六月支那事変の補充召集、広東の黄埔で通信兵として電報、電信の勤務につき、分隊長以下七人で西村に分遣され家庭的な生活をしました。その後、仏印進駐となり、無血の国境突破をして広東にもどり、一年半の軍隊生活で召集解除になり、十五年の暮に内地に帰還しました。

十八年四月頃、和歌山県職安で東京に本社のある日比企業という造船会社の造船工募集があり応募したところ、百人のなかから採用され、東京荻窪で手作業で農業

もできるようにと訓練されました。昭和十八年八月十五日呉出發、船団をくんで比島めざしてのジグザグの航路でしたが、魚雷を受け僚船は沈没、さいわい我が船は軽い損傷ですんだ。台湾で修理し目的地リンガエン湾に着いたのが十月五日でした。

身分は日比企業の社員です。戦争の情勢悪化のため本来の仕事につかず、会社の疎開作業に従事、マニラからバギオを何度も往復しているうちに軍歴のあるものは兵隊に、ない者は軍の囑託として、軍の指揮下にはいることになり、会社の重役も囑託になりました。

— 現地召集となったわけですが酒本さんの軍歴に入っていますか。

その内にバギオから移動することになりましたが、私は若いころトラックの助手をやったことがあるので他の

部隊が乗り捨てた車をひろう役をさせられました。

ハンドルレバーのトップがはいらず、しかたなくローでスタート、障害物をよけながら進んだ。いけども目的地に着かない。バックしようとしたがギアがはいらない。しかたがないのでグルーッと遠まわりして進むしかないということ、しばらくして部隊に着いたら空襲でやられていました。ポロ車のお陰で命拾いしたこともありません。

しばらくバギオから二十キロ北のカガヤン河の近くに移動が終わり、そこに駐屯。船舶部隊に所属したので、武器や物資を川を利用して輸送することになり、竹で筏をつくりました。その筏の監視を命ぜられ、石川県の人と二人で勤務しました。その時現地人の畑を他部隊の兵隊が無断であらすのを守ってやったら、喜んでお札に豚や野菜を持ってきてくれたので、隊の将校もときどき取りにきました。

ある日、本部に帰る命令があり、帰ったらものすごいスコールで川が増水し、折角の筏が全部流されました。私の後任の監視役は処罰をくったそうで、あぶなく難を

逃れました。

それからまた、山へは行って終戦を知ったのは二十年九月二十日だった。

それまでビラははってありましたが敵の宣伝だと相手にしなかった。大使というひとが部隊長と会い、敗戦はつきりしたので時機をみて山を降りることになった。ところがそのころ私は軽いマラリヤにかかりましたが、広島の牧という人と二人が軽症で、動ける人が十人ほどいました。岐阜の人で杉本という小隊長が

「酒本、牧お前ら二人残って看病してやれ。」
といわれ

「適当な時に山をさがれ。」
と命ぜられました。そのうち一人死に二人死に、五人つれて現地人に私物をやって「ソリ」みたいな物に乗って山をさがったのである。

途中でも一人死に、武装解除後、収容所に向かうトラックの上でも死にました。

話が前後しますが、米軍に追われて撤退する途中、空襲のため昼間は寝て夜に行動するわけだが、昼間はそう

眠れず夜行軍で小休止がかかるとその場は眠りこみ、目がさめたら部隊がおらず、置き去りにされたりしました。

そういう毎日がつづいて二か月ぐらい歩きました。食糧はありませんが畑の小屋にはカチカチのトウモロコシがあるんですが、これが一日がかりで煮ても、食べるに固いんですよ。また塩のないのは参りましたね。塩の代わりにとうがらし、ニンニク、レモンでゴマカシて味つけです。バナナ、パイナップルを徴発して食べたので助かりました。

—現地人のゲリラにやられたことは。

それはなかったですね。谷づたいに行軍するんですが、病気で倒れた者はそのまま置いてゆかれる。さきに行った隊の兵隊で倒れたものの死体が、スコールが降ったのち増水した河にドワーと固まって流されてくるのを見た時は悲惨だった。

船舶部隊も大隊から中隊とだんだんわかれて行動するようになり軽機を持たせられた。牛をつれて歩いたが絶壁に突きあたると牛はのぼれず、兵隊の腹におさまって

しまった。途中、路傍の土手に背のう姿で死んでいる兵隊がいる。鼻をつまんで通り過ぎたが、もし肉親だったら抱き着いて泣くだろうと思いました。あき家になった農家や小屋では、うえ死の兵隊の死体が必ず二人や三人があり、戦友の骨を胸にだいた兵隊が寝たまま死んで白骨化していた姿はあわれでした。

山をおりて米軍の武装解除を受け収容所にはいったが、階級別に幕舎が建てられ「牧さん」は軍属なのでそこで別々に収容され、昼間は使役に出たが一日米一合と肉缶一つですから腹がへってしかたがない。広東時代に中国人が軍隊の残飯を取りに来たのを笑ったものですが、今は我が身となり、タバコの吸殻のはいった米兵の残飯をあき缶ですくって持ち帰り、哨兵の目をのがれて戦友と分けあい空腹をしのぎました。

今ではとても考えられない恥ずべき行為ですが、当時は餓鬼道に落ちこんでいたんですね。二十年十二月二十八日マニラから乗船、浦賀に上陸したんです。

—船はアメリカ、食事は。

四日間の船内でしたが食事はマアマアでした。名前は

わすれましたが日本の船でした。ところが収容所にはいる時支給されたのはパンツとランニング、それにPWと背中に書かれたシャツ一枚ですから、向こうにいる時はよかったが日本の冬に帰ったんですから、毛布一枚にくるまっても寒かったです。

浦賀では支那から帰った兵隊と一緒にだったので「ドコから帰ったの」と尋ねられました。向こうはキチンとした軍服ですものね。敗け戦の惨めさを思い知らされましたね。

浦賀に十日までいて家から送られた衣服を着て家に帰りました。

— 衣服は支給されなかったんですか。

はい。上陸するなり家に電報を打って衣服を送るよう頼んだんです。

家に帰ってからわかったんですが、日比企業会社がマニラが戦火に包まれた旨の新聞報道が出たときは心配する家族に「無事マニラ脱出」と知らせ、「バギオ危し」の新聞記事が出ると、「バギオを脱出○○に向かった」と私の行動を細かく家族に知らせてくれていたことを知り有

難く思いました。

帰ってから東京の日比企業会社へ行ったら、マニラ支店長が帰っていて「ご苦労さんでした」とねぎらいを受けたが、比島へ渡った人で本社を訪れたのは私一人のことでした。和歌山から五人行ったんですが私以外は誰も帰ってきませんでした。私の部隊は茨城の人が多かったですね。中隊百二十人で生き残りは四十人です。マラリヤで病死したのがほとんどです。

— 収容所での作業は。

マラリヤ発病でバケツ一杯の水が持ちあがらん時もあったが、コンクリート打ちこみ作業の時ちよっとドラムの操作をやったら、それから重宝がられ、ネコ車でコンクリート運搬をせずに機械係り専門になり、お陰で楽をしました。あと道路づくりもしました。